

第77回 日文研フォーラム



日中の敬語表現

Honorific Expressions in Japan and China



蘇 徳昌

Prof. Su Dechang

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

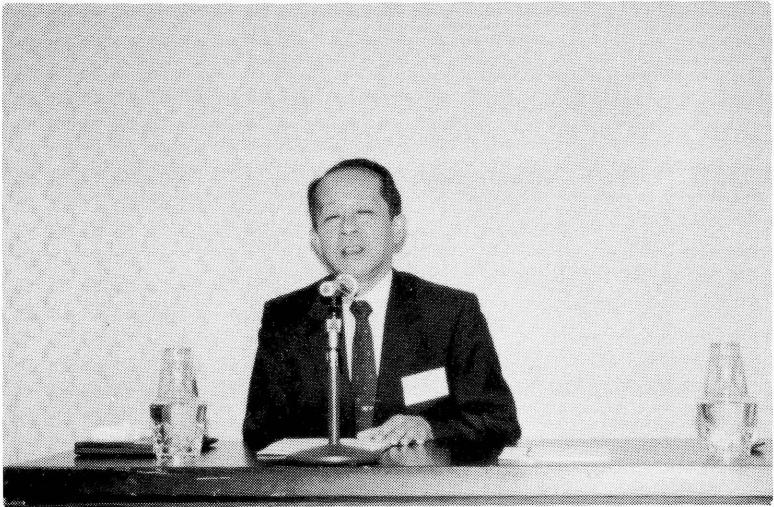
日中の敬語表現

Honorific Expressions in Japan and China

● 発表者 ●

蘇 徳昌

Prof. Su Dechang



1995年 9月 26日 (火)

発表者紹介

蘇 徳 昌

Su Dechang

奈良大学教養部教授

1935年生まれ。1960年北京大學数学・力学学科卒（流体力学専攻）、1966年復旦大學数学・力学研究科卒（偏微分方程式・空気力学専攻）。復旦大學助手・講師・助教授を経て、1985年から教授、現在休職。1978年から相前後して、東京外國語大學・国立國語研究所客員研究員、東北大學客員教授、広島大學教授、大阪市立大學客員教授を歴任、現在は奈良大學教養部教授。専門は中國現代社會論・日中両語対照研究。

主な著書・論文:

日本文法研究、蘇州日語函授中心、1984年。

漢日対照、漢語基本語彙 5000 詞（共編）、上海訳文出版社、1987年。

日漢大辞典（共編）、機械工業出版社、1991年。

二維鈍頭物體的非対称高超声速氣流（共著）、数学論文集、復旦大學、1964年。

日漢敬語の比較と翻訳、日語學習与研究、3号、1981年。

試論文體的統一性、日語學習与研究、1号、1982年。

論格、日語學習与研究、6号、1984年。

人間関係と敬語—日中の比較論的視点から、東北大學日本文化研究所研究報告、第23号、1987年。

句子及其成分的重複、日語學習与研究、6号、1989年。

終助詞の男女性差別、日語學習与研究、2号、1992年。

現代中國社會に於ける末端組織、奈良大學紀要、第22号、1994年。

中國社會安定のカギ、奈良大學紀要、第23号、1995年。

“揺れる中國社會”における人間解放、JMS經營教育、No.146、1995年。

日本語の会話に於いて、話し手と聞き手の関係は端的にその文の文体に表れている。例えば、曾野綾子の「地を潤すもの」という小説の始めのところに、次のような夫婦の会話が出て来る。

「おもしろいことを聞いて来たよ。今度のトンネルなんか山がよくて、くずれて来そうもないから、支保工の間に矢板なんぞいれなくてもいい所が多いというんだ。矢板ってわかるか？」

「わかりません」

「ダイナマイトで岩をくずした後、支保工と呼ばれる柱を立てる。その隙間から小さな岩石の破片が落ちて来るといけないので、普通はその間に、昔風の木の林檎箱をバラしたような木っ切れを、挟み込む。それを矢板と言うんだ」

「それがいららなんですか」

「ああ、岩がいいから、殆どいららないと思われる所も多い。それでも、やってる」

「なぜですか？」

「働く人間の不安感をなくすためには、それだけの無駄をしたほうがいい

んだそうだ。物の考え方が心理学的になって来てる」

「けっこうなことですねえ」

夫は妻に「ダ体」、つまり常体の文で話しているのに対し、妻は夫に「デス・マス体」、つまり敬体の文を使っている。そして、それが一貫している。ということとは、夫婦とも、社会的通念に於ける、妻は夫に敬意を表すべきであるという人間関係を習慣的、或いは無意識的に守っているわけである。

又例えば、古典落語「うそつき弥治郎」の冒頭の切り出し、

うそというものも、世のなかにまるっきりないとこまる場合がございます。商人に世辞愛嬌といううそがあり、傾城に手練手管、仏法に方便といううそがあり、軍人に計略といううそがございます。このようにうそはいろいろと役に立つ場合がございますが、なかには、また、つまらないうそをいつて、人をついだりしてよろこんでいる人がいくらもございます。

などは、「ゴザイマス体」という敬体の文で、落語家が自分自身を聴衆より下に置くことによって、聴衆への敬意を表している好例である。そして、それも、始めから終わりまで、全部「ゴザイマス体」で通している。

敬意を表すと一言で言っても、「敬遠」という言葉があるように、それは「敬而

遠之、敬して遠ざけるものであるかも知れないし、或いは自分自身の身嗜み・品位を保つものであるかも知れないが、いずれにせよ、話し手が聞き手との人間関係を一旦決めた以上は終始同じ文体、常体か敬体で話す、と今まで言われて来た。これを文体の統一性と言う。

中国語の文の場合、人間関係によって、或る程度その文末の語気助詞が制約を受けるが、文体のようにはっきりとしたものはない。それで、例えば中国語の会話を日本語に訳す時は、この点に注意しないと、大変なことになる。事実、「金瓶梅」とか「紅樓夢」のような古典の日本語版は、先ず小説の中に登場する諸人物の人間関係を正しく理解した上で、翻訳しているのである。中国人留学生が日本人の指導教官に向かって、最大の敬意を表そうとして、尊敬語をふんだんに使っても、常体の文で話し掛け、響感を買ったたり、或いは幼稚園児に、自分もその子と同じ年頃の友達になったつもりで、わざと分かりやすく優しい語彙を口にしたのはいいが、「ゴザイマス体」で道を尋ね、吃驚した目で見られたりしたという話しはよく聞く。日中敬語表現の一番大きな違いはここにある。それならそれで、日本語教育でこの点を教えさえすれば事が済むのではないかと思いがちかも知れないが、事實はそうは簡単でないのである。

その原因は今言った文体の統一性にある。文体の統一は相対的なものであって、絶対的ではないのである。ということとは、人間関係は仮令一時的、一回の会話の場面にせよ、固定不変のものではなく、実に複雑な様相を呈しているということである。

以下に例を挙げ、それを見てみよう。

「いらっしやる・下さる・なさる」の命令形「いらっしやい・下さい・なさい」で結ぶ常体の文をその尊敬語の影響を受けてか敬体の文として使う。

「山の芋迄持って行ったのか。煮て食ふ積りか、とろろ汁にする積りか」

「どうする積りか知りません。泥棒の所へ行って聞いて入らっしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだん迄は知りません」

夏目漱石「我輩は猫である」夫婦

先生。さっきの顛末はおききになりましたか。あのとおりです。先生、ほんとうに私は貴方のために体をはります。私の志はわかって下さいますね。この扇子を見て下さい。これが私の気持ちです。

平林たい子「地底の歌」

ここの「見て下さい」文は常体でありながら、少しも常体を感じさせない。むしろ、「わかって下さいますね」こそ、「デス・マス体」であるはずなのに、こちらは敬意度上「ゴザイマス体」に意識されて使われている。

「お疲れでございましょう。じゃ、おやすみなさいませ」
「どうも」

永井龍男「一個」佐伯と隣家の女

「あそばす・ちようだい」も然り。

「ほゝゝゝ、此処に居るよ」

「おや、ま、其処に。早く御入り遊ばせ。御風邪を召しますよ。旦那様はまだ御帰り遊ばしませんでムいますか？」

徳富芦花「不如帰」婦人と老女

「千加ちゃんは どうしている？」

「知りませんよ」

「起きられないようならば、御飯を持って行ってやれよ」

「ふん！冗談もいい加減にしてちょうだいな。私は遊んでるんじゃないやありませんよ。腹がすいたら勝手に起きてきたらいいじゃないの。お姫さまじゃ

あるまいし……」

石川達三「骨肉の論理」夫婦

「有難う・お早よう」など、「デス・マス体」にはそれに当たる言葉がなく、「有難うございます・お早ようございます」を使うしかない。「ダ体」の話しにもよく出て来る。

「永いあいだ、有難うございました。これがお別れよ。もういらしたら駄目。左様なら」

「君は誤解してるんだ。嘘をついて悪かったけど、あの女は二年も前の事しか知らないんだ」

石川達三「神坂四郎の犯罪」私と神坂

女性の場合、仮令全体として常体の文で話す時でも、「だろう」及び「動詞＋う・よう」は避ける傾向にある。

「その事で、あんたにも相談したいと思っていたの。伊之さんにはこれ以上、わたしは無理も言えないでしょう。一生のおねがいだわ。ねえ友子さん。助けてよ」

「あら伯母さん、訳も聞かないうちから、助けるも助けられないも、ございま

せんわ」

石川達三「骨肉の論理」たみ子と友子

ね、気がつかない……その椅子変ってるって思わない……切ったのよ四纏ばかり、脚を剪ってやったの、電気鋸を未樹ちゃんに借りてやっちゃった。ローズウッドって堅いのね。未樹ちゃんが、すぱっと剪ってくれたんでちっともわからないでしょ。脚がひくくなって、具合がいいのよ。楽じゃないこと。

瀬戸内晴美「抱擁」女

「だ」は判断を表す代表的な助動詞である。日本人女性は人前で明確な意思・態度表明を避ける傾向があり、これが又日本人女性の美德・誉れとなっているわけであるが、この「だ」はあまり使わない。例えば、次の言い方がそうである。前者が男性、後者が女性である。

日文研だよー日文研よ

きれいだよーきれいよ

古いのだよー古いのよ

早くだよー早くよ

きつとだよーきつとよ

言うのだよー言うのよ

清潔なのだよー清潔なのよ

妊娠したからだよー妊娠したからよ

新幹線だねー新幹線ね

朗らかだねー朗らかね

入院するのだねー入院するのね

楽しいのだねー楽しいのね

「だろう」を避けるのも同じ理由によるものと考えられる。

衝きあたらないやうに行けばいゝのよ、……ほら、御覧なさい、あの人だつて彼処を突ツ切つて行つたぢやないの。だからいゝのよ、行つて見ませうよ。

谷崎潤一郎「痴人の愛」ナオミ

「あたし此処へ住むわよ」

ぼつんといった。

「厭とはいわせないわよ」

「うん」

「ちよつと狭いけど、お金溜めてうちを建てましょう。子供生れたら困るもの」

川口松太郎「非情物語」マリと敬三

仮令恋人同士という親しい間柄でも、相手に何かを要求するとなると、改まるのは非常に自然なことで、「行つて見ませう・建てましょう」となったのである。そ

の反証として、独り言の場合はそうならない。

「さうよ、あんたが一番優待よ」

「だがお前、まさかさうして一と晩ぢゆう起きてる訳ぢやねえだらう。一体寝る時はどうなるんだい」

「さあ、どうしようか、方へ頭を向けようか。浜さんにしようか讓治さんにしようか」

谷崎潤一郎「痴人の愛」ナオミと私

久保田万太郎の「三の酉」はほとんどあるカプルの対話であるが、「おさら」という女が男に対して、全部で一八二文の話しをしている。その内、常体文が一五七文、全体の八六%を占め、敬体文が二五文、全体の一四%を占めている。敬体文の内、「でせう」で結ばれているのが九文、「ませう」文が三文、「ですもの」文が一〇文、その他が三文である。「ですもの」文に対し、「だもの」文はない。

その娘がどうでせう、十五の春から四十台の今日が日まで、三十年、ずっと芸奴をして来てしまつたんですものね。……あきれるわ。かうと知つたら、あのとき、花園池で、親たちと一しよに死ぬんだつたわ……そのほうがよかつたわ……

久保田万太郎 「三の酉」

女性が男性に向かって少し強く理由を述べるには或る程度その間の距離を引き離さないことにはなかなかできないものである。そのような考えが働いて、敬遠し、常体を「です」に替え、「もの」を付けたのであろう。

ごめんなさい。ちゃんと気をつけてたつもりなんだけど。でも、失敗しちゃったんですもの、仕方がないわね。あなた、怒らないで。

五木寛之 「鳩を撃つ」 昌江

津村節子の「さい果て」に夫婦の対話が多く出て来るが、「春子」はその夫に対し、二七二文の話しをしている。その内、常体文が二四四文、全体の九〇%を占め、敬体文が二八文、一〇%を占めている。敬体文の内、「でしよう」文一〇文、「ましよう」文三文、「ですもの」文六文、「ですって」で結ばれている文が九文で、「だって」文はない。

「なに？」

「だって、佐藤さんがそう言っていたわよ。当座預金の口座がないから、いくら不渡りを出しても平気なんですって」

「そんなこと、わかっている」

「わかっているの？じゃどうしてそんなものを当にするのよ」

津村節子 「さい果て」 志郎と私

「って」は引用を示す格助詞で、つい引用する文の文体に釣られてしまいがちである。因みに、「佐藤」という男は「春子」に全部敬体文で話しをしているし、ここで引用した原文は次のような文である。

私は当座預金でなく普通預金しか持っていませんから、不渡りを出しても営業に差支えありません。

直接引用でなく、間接引用であるが、「佐藤さん」を強く意識していて、文体を變えるまでには至っていないのである。

「いゝえ、あたしは恥じ知らずじゃありません。卑劣でもありません。えゝ、あたしはあなた方の話を聞きました。聞いたのが、なぜ悪いの。そりゃ、あたしだって、聞こうと思って、わざと聞いたのじゃありません。夜なかに、ふと目をさますと、何かひそひそ、話し声が聞こえるじゃないの。あたしだって若い女よ。あんな遅い時間に、あなたとねえさんと、しんみり話をしていれば、つい、気になるじゃありませんか。」

「……」

「無論、あゝいう話を聞くことは、あたしもいいことだとは思ってやしないわ。だから、あたしからすれば、早くふたりがやめてくれればいい。あなたなり、ねえさんなり、どっちかひとり、寝てしまってくれればいいと、どんなに思ったかしれやしません。でも、ふたりの話は、いつになってもやまないんでしよう。あたし、いやになっちまったから、大きなせきをしように思ったの。けど、そんなことするのは、かえってふたりに悪いと思つたから、しかたがない、あたし、じいっと動かずに、ふとんの中にもぐつていたんです。あの晩、あたし、かいまきのえりを口にあてて、どんなに泣いたか知れやしなかつたわ。」

「……」

「あたし、ねえさんが憎らしかった。あんなに人に隠していたことを、あたしにも言うな、言うなって、あんなに口どめしていたことを……。いゝえ、あたしにさえ話さないようなことまで、あなたには話しているんですもの。けれど、あたし、けれど、あたし、そんな話、聞きたくもなんともないから、ふとんを耳の上までかけて、平気で寝てしまおうと思つたの。でも、やっぱり、そう平気にはなれやしないわ。話がとだえれば、とだえ

たで、気になるし、聞こえてくれば、耳について眠れないし……それが悪いと言ふんなら、あなた、どんなにでもあたしを責めてちょうだい。しかし、それほど聞かれて悪い話なら、なぜ、あたしの寝てるそばで、あんな話をなさったの。から紙ひとえじゃ、どんなに聞くまいと思つたって、どうしても聞こえてくるじゃありませんか。」

「何もあたし起き出して行って、そうとあなた方の話を聞いたってわけじゃありはしないわ。こっちは、やめてもらいたいと思つているのに、ひとりでに聞こえてくるんですもの、しかたがないじゃないの。それでも、やっぱり盗み聞きつて言うの。それでも、あたしは恥じ知らずの女なの。」

「……」

「あのとき、あたしが目をさまさなかつたら、なんのこともなかつたと思ふけれど、あたしだって、生きているのよ。いつ、どんなことで、目をさまさないとも限らないじゃありませんか。そばに人が寝ているのに、あなた方も、ずいぶん、不用心な方たちね。自分たちの不用心なことはタナにあげておいて、あたしを卑劣な女だなんて、あんまりじゃないの。そりゃ、聞いていたのが悪いつて言うんなら、あたし、あやまらないじゃないけれ

ど、あんな遅く、あんな話をしていた人は、いったい、どうなんでしよう。」

山本有三「波」襲子

ずいぶんと長い引用になったが、これは襲子の行介に対する反論である。常体文と敬体文を交互に使い分けながら、行介を引き付けたり突放したりしているのである。日本語特有の会話文体の非統一さを余すところなく表している好例である。これは何も女性に限ったことではなく、男性にもあることである。その行介の話しを見てみればすぐ分かる。

「え、あなたとねえさんと話していたこと、あたし、あらかた聞いしまつたの。」

「じゃ、あれを盗み聞きしたんですか。」

「さあ、あゝ、いうの、盗み聞きっていうのかしら。」

「君はそういうことをしても平気なの。」

山本有三の長編「波」の中で、行介は襲子に二五四文発しているが、その内、常体文が一九五文、全体の七七％を占め、敬体文が五九文、二三％を占めている。それに対し、襲子は四二九文話している。その内訳は、常体文三七八文、八八％、敬体文五一文、一二％である。行介は息子を襲子の姉の家に預け、育ててもらっ

ている。そうしているうちに、二人は深い仲になる。これを境に、二人の話し方、文体が変わる。

前

後

常体文

敬体文

常体文

敬体文

行介

九五

五七

一〇〇

二

(六三%)

(三七%)

(九八%)

(二%)

襲子

二三七

三六

一四一

一五

(八七%)

(一三%)

(九〇%)

(一〇%)

前段階では、二人はまだ知り合ったばかりであるし、襲子には世話にもなっていないので、行介は男性であっても、多少遠慮しており、敬体文が三七%も占めている。ところが、襲子は世話する立場にあり、それも子育てとなると男より強い立場になるので、常体文を多く使い、八七%にまで達している。後段階となると、日本人男性の「本性」が前に出て、敬体文をほとんど使わなくなる。襲子は男女の秘事をそれほど重く見ておらず、他の男とも付き合っているので、行介に対す

る態度はあまり変わらない。常体文はたった三%増えたに過ぎない。

会話にはもう一つ能率の問題がある。話し手が何かを聞き手に伝える時、なるべく早くという必要がある場合も有り得る。それで、話しの最初と最後のところは敬体文を使い、真ん中は常体文にする。或いは、常体文で続けて話す時、聞き手のことを気にし、そのところどころに敬体文を挟み、聞き手に対する敬意を損なわないようにしておく。

私は農民の人たちと話をしたときに気がついたんですが、いろいろ御馳走が出た、ビールも出た。中国にもなかなかうまいビールがあります。今の向こうの若い人は、もう老酒（らおちゅう）なんて飲まない。ビールも、私はいただきませんという。煙草もすわない。マージャンもやらなくなつた。消費を極度につつしんで、何とか生産のほうに向けようと努力している。そういう段階です。

茅誠司「雪椿」

「本当ですか」

「本当です。僕には画のことはわかりませんが、僕は今迄にこんなに誠実無比な画を見たことはありません。実によく見てかいてある。しかも実に

愛してかいてある。それ以上実に尊敬してかいてある。誰もこう言う雑草や石をこんなに愛することは出来ないでしょう」

武者小路実篤「真理先生」

日本語の会話ほど、話し手が自分自身と聞き手の関係の位置付けをしないと成り立たないという言語はない。その位置付けというのは、空間と時間の四次元の座標の中での位置付けである。言葉を換えて言えば、静態と動態の両面からの人間関係である。静態とは、主に上下・内外関係である。年齢・性別・職業・身分・地位・階層等及び身内・親友・同僚・団体・政党・国籍等である。動態とは、主に意図・目的、環境・場、話題・文脈等である。伝達・希望・依頼・命令・勧誘・拒否・反論・毀誉褒貶というように、意図・目的は種々様々である。話し手と聞き手の二人だけなのか、それとも第三者がいるのか。仮令聞き手が上司でも、それは仕事場での話しなのか、飲み屋での話しなのか。会話を取り巻く雰囲気も影響する。公的な話しなのか、私的な話しなのか、話題は政治・経済なのか、それとも女・涙なのか。論理的な話しを進め方なのか、感情的な話し仕方なのか。そして、それらのものが時間の推移により、又変化する。一瞬の内に急変する可能性はいくらでもある。

位置付けを行なうのは無論話し手であるが、それはあくまでも話し手の主観に於いてである。話し手が四次元の座標、静態・動態の人間関係をどのようにとらえ、又聞き手の受け取り方を話し手がどのようにとらえるのかが会話の出発点であり、ポイントなのである。社会の通念・文化・歴史・風俗・慣習等に制約されたり、影響を受けるのは言うまでもないが（特に、五倫、五常、父子の親・君臣の義・夫婦の別・長幼の序・朋友の信、個人中心的 individual-centered 或いは超自然中心的 supernatural-centered とは違う状況中心的 situation-centered 文化の制約と影響）、最終判断するのは話し手本人である。話し手の価値観・教養・性格・気品・嗜好・感情等が判断を左右する。

日本語の敬語表現、或いはもう少し正確に言えば待遇表現の難しさはこの話し手の人間関係の位置付けにあり、中国語や他の外国語の待遇表現と大きく違うところである。

日本語の文をはじめ日本語という言葉は客観的で、単純なコミュニケーションの手段・道具ではない。それを使用する人の影響が色濃く移り、というよりも、その人のものになってはじめて使用できるものなのである。つまり、主観的で、複雑な手段・道具なのである。それが端的に文体に表れる。文体を無視したら、

日本語の文にはならないし、コミュニケーションは成り立たなくなる。

文章なら、例えば「デアル体」で、最初から最後まで押し通せるが、会話はそうは簡単に行かない。

「おまえは、ほんとうにそんなふうにしかな歩けないのか。」

「あ、こっちの足、よく動かないんだよ。」

「動かない？どれ、見せろ。どこが動かないんだ。」

「どこだか、よくわかんない……」

「自分でわからないやつがあるか。こゝだろう。このひざんとこだろう。どうだ。こゝ、押すと痛いかい。」

「うゝん。」

「痛くない？じゃ、こうしてさわっている、おとうさんの手は？」

「さわってるかどうか、わからないくらいだ。」

山本有三「波」行介と息子の進

「あなたは結婚なさらないんですか。」

「あら、どうしてそんなことお聞きになりますの。それより、あなたこそ、なんでご結婚なさらないんです。」

「ぼくはこういう厄介ものがありますからね。」

彼はあごで軽く進のほうをさした。

「でも、おひとりっきりですもの、なんでもないじゃありませんか。」

「いや、この子じゃ少し考えさせられたことがありますね。ぼくはかなり、結婚がこわくなっているんですよ。」

同上 行介と襲子の姉高子

親と子のような身内同士、或いは行介と高子のような対等で、少し距離を置く二人で、動態的にも別に変わった事がなければ、全部常体文、或いは全部敬体文で言葉を交わせる。

「今、何をしていた。」

「なんにもしていません。」

「なんにもしていないことはない。」

「ほんとうに、なんにもしていません。」

「うそをつけ。先生は見ていたぞ。」

「……」

「いいから、こつちへきなさい。」

同上 行介と生徒

「いゝえ、両方の代理でございます。」

「しかし、本人の意見は、そうじゃないでしょう。」

「いゝえ。」

「おかしいですね。それでは、なんだか、話がちがうような気がします……」

「そんなことはございません。」

「けれども、本人がぼくのところによこしている手がみには、今のようなことは、ひとことも書いてありません。どこまでも、ふたりはいっしょになる決心のように見えますが。」

「どういたしました。とんでもないことでございます。ひと様の奥さんをおもらいするなどということは……」

同上 行介と準蔵

行介と生徒、或いは代理人の準蔵というような、はっきりしている場合は、話し手も聞き手も位置付けが明瞭であるので、文体はそれぞれ終始一貫しており、統一している。

人間関係が静態的にも、動態的にも変わらない場合は当然であるが、静態的に

変わっても、動態的に変わらない場合、やはり統一している。

いゝえ痛いことはござりませなんだ御師匠様の大難に比べましたら此れしきのことが何でござりませうあの晩曲者が忍び入り辛き目をおさせ申したのを知らずに睡つてをりましたのは返す返すも私の不調法毎夜お次の間に寝させて戴くのはかう云ふ時の用心でござりますのに此のやうな大事を惹き起しお師匠様を苦しめて自分が無事でをりましたは何としても心が済まざり罰が当つてくれたらよいと存じまして何卒わたくしにも災難をお授け下さりませかうしてゐては申訳の道が立ちませぬと御霊様に祈願をかけ朝夕拝んでをりました効があつて有難や望みが叶ひ今朝起きましたら此の通り両眼が潰れてをりました定めし神様も私の志を憐れみ願ひを聞き届けて下さつたのでござりませうお師匠様お師匠様私にはお師匠様のお変りなされたお姿は見えませぬ今も見えてをりますのは三十年来眼の底に沁みついたあのなつかしいお顔ばかりでござります何卒今迄通りお心置きなうお側に使つて下さりませ俄盲目の悲しさには立ち居も儘ならず御用を勤めますのにもたどたどしうござりませうがせめて御身の周りのお世話だけは人手を借りたうござりませぬ

谷崎潤一郎「春琴抄」佐助

春琴と佐助はお嬢様と奉公人、師弟という間柄から、実質的な夫婦仲になり、三男一女を設けても、お互い心の中での位置付けは変わらず、佐助は「ゴザイマス体」を使い、春琴は「ダ体」を使い通したのである。

そのことは「春琴抄」を見れば分かることであるが、特に佐助がてる女に話した次の件がそれを物語っている。

春琴の方は大分気が折れて来たのであつたが佐助はさう云ふ春琴を見るのが悲しかった、哀れな女気の毒な女としての春琴を考へることが出来なかつたと云ふ畢竟めしひの佐助は現実には過去の記憶の世界だけがあるもし春琴が災禍したのである彼の視野には過去の記憶の世界だけがあるもし春琴が災禍のため性格を変へてしまつたとしたらさう云ふ人間はもう春琴ではない彼は何処までも過去の驕慢な春琴を考へるさうでなければ今も彼が見てゐるところの美貌の春琴が破壊される

ところが、人間関係が静態的に、上下・内外の境界線の近くにあり、或いは動態的に、変化が起る場合、話し手による位置付けが変動を見せることがよくある。それ故、文体の統一性が保てなくなるわけである。そして、こういう場合が必ず

しも少なくないということが問題を複雑にしているのである。

中国語の敬語表現には日本語の文体に当たるとような表現がなく、統一性も非統一性も勿論ないということはしばしば言及してきたが、ここに例を少し挙げておく。

「もう塾がひけたのか？お師匠様はおまえに課業をきめてくださったか？」

「はい、きめてくださいました。朝のうち復習、食後習字、お午からは解
釈と文章を読むことでございます」

「もう帰ってよい。なおご隠居さまの処へ行ってお話のお相手をしなさい。
おまえもこれからは遊び呆けてばかりいずに、少しは人間の道理も習わね
ばいかん。晩は早く休み、毎日学校に行くんだから、早起きするんだぞ。
これ、わかったか？」

曹雪芹作、松枝茂夫訳「紅樓夢」賈政と宝玉

「ほかのみなさんへも伺っていらっしやうなくちゃいけませんわ」

「ぼく、もうなんだか動くのも億劫です。それよりあなたとゆっくりお話
しましょう。それにお父さまは早寝早起きするようにとおっしゃいまし
たし、ほかのみなさんへは明日伺うことにします」

「じゃ遊んでいらっしやい。でも、もうお休みにならなくちゃいけないんでしょ？」

「なあに、ぼく疲れてなんかいやしません。ただ気がふさいでならなかったんです。今あなたとお話しして、やっとはればれた気持ちになったと思ったら、また追いついてを食わすんですね」

同上 黛玉と宝玉

「あなたはまだ眠ってはいらっしやらなかったんですの？ つまらぬことは考えないで、ぐっすりお休みになりませんか、明日ご本がうまく読めませんことよ」

「ぼくもそう思ってるんだが、どうしても眠れないんだ。ちょっと、ぼくの掛蒲団を一枚剥いてくれないか」

「今夜は暑くはございませんよ。お剥ぎにならないほうがようございます」
「なんだかいやに胸苦しいんだ」

同上 襲人と宝玉

宝玉はその父、恋人、侍女とそれぞれ「ダ体、デス・マス体、ゴザイマス体」で話しているが、原文の中国語にはそのような使い分けが全然ない。(付録を参照) 無

論語彙や話し方の調子、声の出し方には違いがあるであろうが。これはあくまで訳者が宝玉と父、恋人、侍女との関係を理解し、日本語の敬語表現にしたわけである。

そもそも、文というものには、話し手の話題・聞き手に対する態度が表れているのは言うまでもないが、日本語の場合は情意的・主観的なものから始まり、論理的・客観的なものへと進み、情意的・主観的なもので終わる。文末に位置する文体に著しく聞き手との関係が表れるのである。ところが、中国語には文体に相当するものがない。その意味では、日本語は中国語よりも話し手が聞き手に対する態度を顕にしている言語と言えるし、その点は決して曖昧ではないのである。

勿論、中国語は、例えば人称代名詞がある場合、それに人間関係がはっきり表れるのはこれ又言うまでもないが、それは終始一貫していて、途中動態・静態、つまり状況に応じてくる変わるということは先ずない。ところが、日本語の文体は状況に応じていても簡単に変わるものである。要するに、話し手が聞き手との間の関係をどうとらえているかがすぐ文体に表れるのである。日本人は控え目で、感情をあまり顔に出さないと言われているが、少なくとも言葉の上では決してそうではないのである。

これまで、日中敬語表現の一番の違いである文体に焦点を絞って論じてきたが、結論としては、日本語の敬語表現は日本人の心理及び日本社会に於ける人間関係を把握するところが大きくあり、それらに対する理解なくして日本語の敬語表現を把握することは不可能であるということである。また、逆に言えば、日本語の敬語表現から日本人の微妙な心の変化及び人間関係を垣間見ることができるということでもある。

付 録

“這早晚就下了學了麼？ 師父給你定了工課沒有？”

“定了。早起理書、飯後寫字、晌午講書唸文章。”

“去罷、還到老太太那邊陪着坐坐去。你也該學些人功道理、別一味的貧頑。”

晚上早些睡、天天上學早起來。你聽見了？”

“你也該瞧瞧他們去。”

“我這會子懶待動了、只和妹妹坐着說一會子話兒罷。老爺還叫早睡早起、

只好明兒再瞧他們去了。”

“你坐坐兒、可是正該歇歇兒去了。”

“我那裏是乏、只是悶得慌。這會子、咱們坐着才把悶散了、你又催起我來。”

“你還醒着呢麼？你倒別混想了、養養神明兒好唸書。”

“我也是這樣想、只是睡不着。你來給我揭去一層被。”

“天氣不熱、別揭罷。”

“我心裏煩躁的很。”

発表を終えて

人生とはもともと人が生きることであろうが、実際は人と生きることではなからうか。私はこの世に生を受けてから三分の一強を日本人と生き、三分の二弱を中国人と生きて来た。仕事を終え、家に帰ってからも、中国人の父と日本人の母・妻との暮らしである。というふうに、一生日中文化・言語が混在する環境にいる訳であるが、別に違和感とかを感じた覚えはない。両親は中国で「理想夫婦」と言われ、私も妻と「国籍」で衝突したことはない。それは何も日中の文化・言語の内容・表現に異質性がないということではなく、接点があり、人間は非常に上手にその接点を通り、相手の中に入り込めるからである。勿論その人々にその気持ち・心がない場合は仕方がないが。人間には諸々の文化・言語を取得する無限の能力がある。今までその能力は相当抑さえられ、人間が人間としての成長が妨げられて来たが、熱戦や冷戦がようやく終息し、人がどんな人とも生きて行けるようになりつつある。国際日本文化研究センターが極力展開している諸事業の狙いはその人間の無限の能力を伸ばすところにあるのではなからうか。そのようなセンターのフォーラムで発表させていただいたことは私にとって最大の栄誉であり、一生記憶に残るものである。そして、たとえ日中の敬語表現、それもその一端にしか触れられなかったにせよ、御協力できたことを大変嬉しく思っている。当該センターの濱口恵俊教授の心暖まる鋭い御指摘及び臼井祥子研究協力専門官の用意周到完璧な御配慮には唯々頭が下がる次第である。

蘇 徳 昌

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	巖 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳: アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST III 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロップ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスタ (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐる－」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 -米国の日本美術コレクションの一例として-
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践-有島武郎の場合-
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 -旧身分文化との関連を中心として-
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択: 10世紀の日本と朝鮮 -科举制度をめぐって-
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り - 平安朝文学の特質-
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9. 13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACE 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6. 11. 15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6. 12. 20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1. 10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2. 14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3. 14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」王
73	7. 4. 11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7. 25 (1995)	崔吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9. 26 (1995)	蘇徳昌(奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
78	7.10.17 (1995)	李均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「－日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19 (1995)	タチャーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1. 16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

82	8. 2. 13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
----	--------------------	---

○は報告書既刊

発行日 1996年3月20日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

©1996 国際日本文化研究センター

■ 日時

1995年9月26日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

